

第46号

発行日：平成20年9月17日
発行者：医学研究科広報委員会
印刷：やまと印刷株式会社

弘前大学大学院医学研究科・医学部医学科広報紙



- 1面：医学研究科長医学部長寄稿
 - 2面：弘前医学会総会報告
 - 3面：県立保健大教授に就任して
 - 4面：解剖体慰霊祭・動物慰霊祭
 - 5面：スクーリング&オープンキャンパス開催
 - 6面：ヒロダイ・いきいき元気塾を開催して
 - 7面：研究室紹介 歯科口腔外科学講座
 - 8面：東医体速報・人事異動
- 題字 弘前大学長 遠藤正彦氏筆

医学研究科長 寄稿
医学部

医学科定員増について

弘前大学大学院医学研究科長・医学部長 佐藤 敬



昭和六十三年度まで、弘前大学医学部の学生定員は百二十名であったこともあり、なんとか対応できるのではないかと思っ

ており、一部の講義室の椅子、机は規格も合わなくなっているのではないかと思います。加えて、正確な比較はしていませんが、当時に比べると教員数は相当減っています。国家公務員人件費5%削減が大学にも適用されていますので、今後ともいくらかは教員が減る可能性もないわけではあり

ません。医学部の教育は講義だけでなく、少人数教育や実習も多いことから、十五名増のわりには教育負担の増大は小さくないものと危惧されます。

このような教育の充実に必要な財源を私たちはどこに求めるべきなのか？学内の一部には、十分な予算的措置なしに、学生定員増に対応するべきではないという意見があるかもしれないと

思っています。もちろん、そのような予算的措置があつて然るべきですし、なんらかの方法でそれを実現する努力は必要です。しかし、一方で私たちは、そのような措置を最初から条件とするのではなく、ひたすら教育の成果を挙げる努力をすることに

よつて、評価を得ていく姿を挙げる努力をすることに

平成二十年度 科学研究費補助金採択状況

皮膚科学講座 教授 澤村大輔

医学研究科および附属病院における平成二十年度の科学研究費補助金採択状況が公表されました。まずは付表をご覧ください。平成十九年度と比較すると、採択件数、採択率、交付額はそれほど変わりませんで

し、特筆されるのは、申請数の増加であります。この数年來、医学研究科をあげて取り組んでいる、アドバイザー制度などの科研費の獲得強化プロジェクトが少しずつ効果をあげていることがわかります。

す。あとは、書き方ではないでしょうか。科研費の採択には、1)その研究者の業績や獲得してきた研究費などの過去の実績と2)今回の研究内容が評価の対象となります。1)の方が申請する時点では変えようがないので、2)を工夫

してください。

平成19年度	申請数	採択数	採択率(%)	交付額(千円)
医学研究科	150	51	34	160,150
附属病院	104	21	20.2	32,900
全体	254	72	28.3	193,050

平成20年度	申請数	採択数	採択率(%)	交付額(千円)
医学研究科	160	52	32.5	158,355
附属病院	127	19	15	30,035
全体	287	71	24.7	188,390

平成20年度	医学研究科	附属病院
特定領域	6	0
特別研究員奨励費	1	0
基盤研究A	1	0
基盤研究B	9	0
基盤研究C	20	7
基盤研究S	1	0
萌芽研究	6	1
若手研究A	0	0
若手研究B	7	7
若手研究(スタートアップ)	1	1
奨励研究	0	3
合計	52	19
総計	71	

た。特筆されるのは、申請数の増加であります。この数年來、医学研究科をあげて取り組んでいる、アドバイザー制度などの科研費の獲得強化プロジェクトが少しずつ効果をあげていることがわかります。

す。あとは、書き方ではないでしょうか。科研費の採択には、1)その研究者の業績や獲得してきた研究費などの過去の実績と2)今回の研究内容が評価の対象となります。1)の方が申請する時点では変えようがないので、2)を工夫

してください。

巻渕基金による 大学院生支援制度の創設

医学研究科長 佐藤 敬

昭和五十四年に本学を卒業され、藤沢市民病院で皮膚科医として活躍されていた巻渕秀夫先生は志半ばで夭逝され、先生のご遺志と、ご遺族のご理解により、弘前大学大学院医学研究科に巻渕基金が平成十六年に創設されました。その一部が学生用の「巻渕ラウンジ」新設の費用に充てられたことは、「医学部ウォーカー」四十二号に紹介されたところでもあります。

今回、この巻渕基金を元に大学院生支援制度が新たに設けられました。これは、大学院医学研究科基礎系講座に所属する新入生（社会人学生を除く）を毎年度一人選抜し、入学金と授業料を三年間にわたつて支援するものです。原則として、アルバイト等の収入のない大学院生を対象とします。特に、医学研究を目指す他学部出身者がこの制度を利用して大学院に進学する機会が広がったのです。希望者は指導教授を介して、医学研究科学事委員会に応募し、同委員会で選考することになります。

亡くなられた巻渕先生と、お母様をはじめとご遺族の皆様にご感謝申し上げます。私たちは、大学院教育・研究のさらなる充実を果すことで、ご厚志にお応えする決意を新たにしたいと思っております。

問い合わせは、医学研究科学務グループ大学院担当（内線五二〇六）までお願いします。



第九十二回弘前医学会
総会が弘前市医師会（総会
長 田村瑞穂弘前市医師
会長）の担当で、平成二十

第 92 回

弘前医学会総会報告

平成十九年度庶務幹事 保 嶋 実
(臨床検査医学講座教授)

年六月十四日(土)と十五日(日)の二日間、弘前市のホテルニューキャッスルで開催された。十四日午後三時から評議員会、続いて午後四時からは開会式そして総会が行われた。

総会に引き続いて、分子病態病理学講座八木橋操六教授から「日本人 2 型糖尿病の脾病理— β 細胞の脱落を防ぐために」と題して、特別講演が行われた。2 型糖尿病の病態の概念は、高血糖あるいはインスリン分泌異常よりも脾 β 細胞量(β 細胞の脱落)が病期の進展を反映するものとして重要視されるなど、教室の最新の研究成果を踏まえ、大きく変わりつつあることを示した説得力のある斬新なもので、会員一同深い感銘を受けた。余韻の残る中、懇親会が催され、弘前市医師会のおもてなしを十分に堪能し会員相互の一層の交流を深めた。

翌十五日は午前十時から十五題(学内九題を含む)の一般演題の発表と弘前医学会賞授賞式が行われた。新たな診断法や治療法を目指した最先端の基礎的研究から、示唆に富む症例報告、最新の診断技術、新たな医療チームの導入、地域救急医療の現況など、当に弘前医学会ならではの多方面にわたるしかも水準の高い発表があり、実りある議論が展開された。優秀発表賞には脳神経内科学講座瓦林毅先生の「抗アミロイド β 蛋白 40 特異抗体を用いた脳アミロイドアンギオパチーの免

疫療法」が選ばれた。審査委員長の石澤誠先生(弘前市医師会理事)からは「いづれの発表も甲乙付けがたい、接戦であった」との評評があった。また、平成十九年度弘前医学会優秀論文賞は「弘前医学」第五十九巻に掲載された十六編の論文の中から、感染生体防御学講座成田浩司先生の「Protective effect of intranasal vaccination with nontoxic mutant toxic shock syndrome toxin 1 against

Staphylococcus aureus infections」が選ばれ、八木橋操六弘前医学編集委員会副委員長から「研究の質が高く、満場一致の選考であった」との評評があった。今回の総会も、各々の発表内容が充実していたことはもちろんであるが、座長を務めた弘前市医師会の今村憲市先生(特別講演)、石澤誠先生(一般演題)、澤田美彦先生(一般演題)そして工藤幸志先生

(一般演題)の手慣れた進行で活発な議論が展開されたことと延べ百十名にも達する多数の出席者があったことなどから、大いに盛り上がりを見せた。次回の弘前医学会は、平成二十一年一月三十日(金)に医学部コミュニケーションセンターで第百四十六回例会が開催され、一般演題とともに第十三回医学部学術受賞記念講演が予定されている。

弘前医学会 優秀発表賞を受賞して

神経内科 講師 瓦 林 毅



このたび弘前医学会で優秀発表賞を頂きました。ありがとうございます。

東海林教授をリーダーとする私たち認知症グループはもう十五年以上も前からアルツハイマー病(AD)のモデルマウスの開発を続けてきました。脳アミロイド β 蛋白(A β)の過剰産生が家族性アルツハイマー病の原因とわかり、これを過剰産生するトランスジェニックマウスを製薬会社と共同で作成しました。百以上の系統を作成しました。百以上の系統を作成しました。百以上の系統を作成しました。

マウスは一系統のみで、しかも蓄積したのは脳でなくなぜか脾臓でした。論文を投稿したのですが、これは moon shooting project だと酷評されて reject の嵐で、そのうちに脳にアミロイドのたまるマウスがアメリカで発表されてしまいました。私は脳にアミロイドのたまるマウスを扱いたくなくて一九九七年にフロリダのジャクソンビルにあるメイヨークリニックのアルツハイマー病センターに留学しました。その後三年三ヶ月そのマウス Tg2576 の解析を行いました。二〇〇〇年に帰国しました。帰国後は Tg2576 マウスに加え、プレセニリンやタウを発現させたアルツハイマーモデルマウスと新たに作成したパーキンソン病の原因遺伝子の一つ *alpha* シヌクレインを産生するモデルマウスの解析を行って

きました。二年前に岡山から三百匹のマウスと共に弘前大学に赴任し、以後もこれらのマウスを用いて病態の解明と治療法の開発を行っています。幸いなことに動物実験施設ではマウスを飼育する十分なスペースを確保していただき、マウスをプールで泳がせて学習機能の実験をすることもできるようになりました。今回の弘前医学会では抗アミロイド β 蛋白 40 特異抗体を用いたアミロイドアンギオパチーの免疫療法という題で発表をさせて頂きました。AD の治療法として A β の免疫療法が有効であることが示されましたが、従来の免疫療法ではアミロイドアンギオパチーはかえって増強し、脳出血の副作用が報告されています。これに対する治療法を開発するため我々は Tg2576 マウスにプレセニリンマウスを掛け合わせてアミロイドアンギオパチーを多量に蓄積するマウスモデルを作成しました。そしてアミロイドアンギオパチーの主成分である A β 40 を特異的に認識する抗体を用いて免疫療法を行いました。A β 40 抗体は血中への A β 40 のクリアランスを特異的に亢進し、アミロイドとして沈着する不溶性の脳 A β 40 の蓄積を選択的に減少させました。よって抗 A β 40 抗体の

による皮下免疫が黄色ブドウ球菌全身感染に対し有効であることを報告致しました。一方、粘膜免疫は血中 IgG だけではなく粘膜上に分泌型 IgA を誘導できることが知られています。今回の研究では mTST-1 を抗原とし、無毒変異大腸菌易熱毒素(mLT)をアジュバントとした経鼻粘膜免疫の黄色ブドウ球菌全身感染及び鼻腔内定着に対する防御効果を検討しました。免疫群マウスでは、黄色ブドウ球菌全身投与後の生存率は上昇し、臓器内の生菌数は減少しました。さらに鼻腔内投与後の当該部位での生菌数は減少しており、本経鼻粘膜免疫は全身感染だけではなく鼻腔内定着に対しても防御効果を示すことが示唆されました。免疫群マウスでは血中及び気管支

メチシリン耐性黄色ブドウ球菌は難治性院内感染症の主要な原因菌であり、鼻腔内は黄色ブドウ球菌の主要な保菌部位として知られています。先に、私たちは無毒変異毒素性ショック症候群毒素-1(mTST-1)に



弘前医学会 優秀論文賞を受賞して

動物実験施設 助教 成 田 浩 司

投与はアミロイドアンギオパチーの有効な治療法と考えられました。ところが同様の抗体を AD 患者さんに投与する臨床試験が今年日本でも始まることになりました。基礎研究から臨床試験へと進むスピードが速くなり驚くばかりです。今後とも AD を初めとする認知症疾患、パーキンソン病などの神経変性疾患の病態解明および治療法開発を臨床診療と共に進めていきたいと思います。

この研究テーマは、私が大学院に入学して約半年後に頂きました。当時は研究の進め方も分からず、一から教えて頂き論文という形にすることができました。御指導頂きました感染生体防御学講座の中根明夫教授、胡東良准教授はじめ講座の皆様、また共同研究者であります藤田保健衛生大学微生物学講座の辻孝雄教授には心から感謝申し上げます。今回の受賞を励みにしていきたいと考えております。今後とも、さらなる御支援ならびに御指導の程宜しくお願い致します。

肺胞洗浄液中の抗 TST-1 抗体が増加し、鼻咽頭関連リンパ組織における抗体産生細胞数が増加していました。一方、免疫群マウスの脾細胞を TST-1 で刺激すると IFN- γ の産生誘導が増強し、Blood Killing assay では、免疫群マウス全血の黄色ブドウ球菌に対する殺菌作用は有意に増強していました。これ等の結果より、全身感染においては、抗 TST-1 抗体と共に、IFN- γ による好中球の殺菌作用の増強が、また鼻腔内定着においては抗 TST-1 IgA が、本経鼻粘膜の感染防御効果に重要な役割を果たすことが示唆されました。

この研究テーマは、私が大学院に入学して約半年後に頂きました。当時は研究の進め方も分からず、一から教えて頂き論文という形にすることができました。御指導頂きました感染生体防御学講座の中根明夫教授、胡東良准教授はじめ講座の皆様、また共同研究者であります藤田保健衛生大学微生物学講座の辻孝雄教授には心から感謝申し上げます。今回の受賞を励みにしていきたいと考えております。今後とも、さらなる御支援ならびに御指導の程宜しくお願い致します。

平成二十年度弘前大学医学部

鵬桜会総会並びに 懇親会報告

整形外科科学講座 教授 藤 哲

哲

平成二十年五月三十日午後六時より、ベストウエスタンホテルニューシティ弘前にて、平成二十年度弘前大学医学部鵬桜会総会並びに医学科三年次編入学生の歓迎を兼ねた懇親会が行われた。総会では、庶務報告・監査報告・各種議案が検討され、大きな問題もなく円滑に進行された。毎年会費納入率が減少しているのが気掛かりな点で、今後会費の値上げなども含めた

検討委員会を立ち上げることにした。また公益法人の新制度に伴い、鵬桜会の方向性について検討する委員会を設置することになった。例年通り、医学科三年次編入学生への記念品の贈呈ならびに東医体優勝の団体・個人への表彰が行われた。総会の後、懇親会が行われた。会は、鵬桜会常務理事宇野千春先生の開会のことばの後、理事長石戸谷忻



鵬桜会理事長 石戸谷先生

第五十五回

日本麻酔科学会 最優秀演題賞を受賞して

麻酔科 講師 櫛 方 哲 也

本年（二〇〇八年六月十二―十四日）横浜市で開催された日本麻酔科学会第十五回年次大会において麻酔科学会から最優秀演題賞を頂きました。全くもって望外の喜びです。この研究は従来からの教室の研究主眼である麻酔機序の一環を為すものです。全身麻酔は中枢神経に作用しその麻酔作用を発現するものですが、我々は神経伝達物質ノルアドレナリン（NA）神経活性と麻酔薬

の関係に注目して全身麻酔機序の解明に努めてきました。その結果、全身麻酔薬はNA活性を通常の五〇〇％程度に亢進させるもの（NMDA型・ケタミン、亜酸化窒素等）と五〇％以下に減弱させるもの（GABA型・チオペンタール、プロポフォール等多数）に分類されるのが解りました。また、NA活性を通常の二〇〇％程度に亢進させると何れの麻酔薬でも麻酔時間（意識消失時間）が有意に

短縮することも発見しました。例えば強力な内因性覚醒物質であるオレキシンはNA神経活性を二〇〇％程度に亢進させ（Microdialysisの所見）NMDA型・GABA型の何れの麻酔時間も短縮させました。その他の条件（α受容体作動薬）でも同様の結果が得られました。本研究はこれらの結果を基にNAを特異的毒素であるDSP4で破壊した条件下でケタミンの麻酔時間はどうか研究したもので

す。ケタミンはNA活性を亢進させるので、亢進するべきNAが破壊されている条件では麻酔時間が短くなるのではと予想したのです。結果が予想通りになったので今回受賞ということになったわけですが。我々は今、麻酔を減弱させるNA活性（通常の二〇

〇％程度）の意味について考えています。NAの面からみると単純な抑制をかけるもの（GABA型）、強度の亢進をもたらしめるもの（NMDA型）もおしなべて中枢神経系を程よく興奮させることが麻酔時間の短縮に繋がるといふことらしいのですが、過ぎたるは猶及ばざるが如しといふべきでしょうか。そういうえば体温や血糖値も極端に正常より外れると何れも意識消失をもたらしめます。中枢神経系は各構造が調和した活動をするにによって様々な機能を発現しているのではないのでしょうか。特に意識の発現には各構造の精巧な調和と活動が必要だと思っています。

青森県立保健大学教授に就任して

青森県立保健大学理学療法学科 教授 神 成 一 哉



成十八年に弘前大学を辞して、ときわ会病院に転職しておりました。それが今回の急展開で曲がりなりにも学問の世界に戻った形になるので、周りの方々にはわかりづらい印象を与えたかもしれません。

実際、私自身ときわ会病院に移ってからは普通の内科医師として地域医療に専念しておりました。しかし、心のうちではどこかまだやり残した仕事があるのではないかという思いがあったのは事実です。そんなときにタイミングよく青森保健大学の話があったので、熟慮の上、再度転職を

決意した次第です。どこでも医師不足の折、ときわ会病院には私のわがままを聞き入れていただき大変感謝するとともに、大変申し訳なく思っています。弁解させてもらえば、青森保健大学での仕事も、別の形で地域の医療に貢献することになると考えております。

さて、青森保健大学に赴任してからの仕事は、何とんでもない教育の比重が大きいです。解剖学、内科一般から医学概論まで講義が割り当てられており、日々講義の準備に追われながら何とか乗り切っているという感じです。後期になるとまた実験再開

に就いては、率直に言って難問山積です。私は本学で、弘前大時代から続けているパーキンソン病モデル動物を使った研究をもう一度発展させたいと希望を抱いております。しかし、本学での研究設備は十分ではなく、まだ実験再開

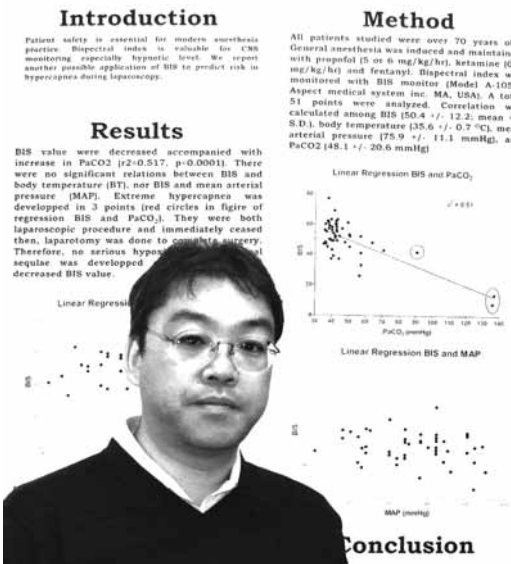
に就いては、率直に言って難問山積です。私は本学で、弘前大時代から続けているパーキンソン病モデル動物を使った研究をもう一度発展させたいと希望を抱いております。しかし、本学での研究設備は十分ではなく、まだ実験再開

に就いては、率直に言って難問山積です。私は本学で、弘前大時代から続けているパーキンソン病モデル動物を使った研究をもう一度発展させたいと希望を抱いております。しかし、本学での研究設備は十分ではなく、まだ実験再開

に就いては、率直に言って難問山積です。私は本学で、弘前大時代から続けているパーキンソン病モデル動物を使った研究をもう一度発展させたいと希望を抱いております。しかし、本学での研究設備は十分ではなく、まだ実験再開

に就いては、率直に言って難問山積です。私は本学で、弘前大時代から続けているパーキンソン病モデル動物を使った研究をもう一度発展させたいと希望を抱いております。しかし、本学での研究設備は十分ではなく、まだ実験再開

に就いては、率直に言って難問山積です。私は本学で、弘前大時代から続けているパーキンソン病モデル動物を使った研究をもう一度発展させたいと希望を抱いております。しかし、本学での研究設備は十分ではなく、まだ実験再開



- 受賞対象演題
演題名：脳内ノルアドレナリン作動性神経活性はケタミン麻酔機序に与える影響
- Brain noradrenergic neuronal activity is responsible to mechanism of ketamine anesthesia.
- 1 櫛方哲也、1 遠瀬龍二、1 吉田仁、2 田淵博子、3 工藤剛、3 工藤美穂子、3 廣田和美
 - 1 弘前大学医学部附属病院、2 双仁会厚生病院、3 弘前大学大学院医学研究科

平成二十年度解剖体慰霊祭

生体構造医科学講座 教授 加地 隆

平成二十年度の弘前大学医学部解剖体慰霊祭は、五月九日（金）の午後一時半から弘前文化センターで行われた。慰霊祭にはご遺族の方々、白菊会員の皆様においでいただき、また遠藤学長をはじめ各方面からの来賓もお迎えし、医学部医学科および保健学科の教職員と学生、総計約三百名が出席した。

慰霊祭の時期は、医学部の授業カリキュラムの変更にもなっており、人体解剖学実習の時期が夏休みの前から

後へと移行したことによって、昨年からリンゴの花開く季節の春に変更になった。約二十年程前までは春に行っていたので、時期に関しては以前にもどったことになる。

慰霊祭に先立って、この数年恒例になつた弘前大学医学部教職員・学生など関係者による感動的な慰霊のための音楽が演奏された。引き続き式に入り、荘厳な葬送行進曲が流れるなか解剖体のご芳名が奉読され、つぎに佐藤医学部長による祭詞、学生代表（医学科三年 明本由衣）による弔辞、代表者献花（佐藤敬医学部長、花田勝美医学部附属病院長、對馬 均医学部保健学科長、遠藤正彦弘前大学長、医学科三年角野莉那、保健学科三年小林健幸、奥田稔白菊会理事

長）が行われた後、花田病院長からお礼の言葉があった。そして最後に参会者全員がしめやかな調べのなか献花を行って式を終了した。

慰霊祭終了後、ご遺族や白菊会員の皆様をも交え、医学部関係教職員は弘前市霊園にある医学部納骨および埋骨施設にお参りして献花と黙祷を行い、慰霊祭で奉読された献体者名簿を長期納骨施設にお納めした。

今回の慰霊祭で解剖学担当講座の二教授とも交代となる節目の慰霊祭となり、個人的にも感慨深い一日であった。

コラム

医学部

こぼれ話：

医学部基礎棟の改修工事が終了し、どの講座も新しく快適な基礎棟に引っ越しとなりました。ただ、気になるのは、表示がわかりにくいのか、もしくはない。学生、業者、配達の人がきよろきよろしながら歩いていく。こちらの建物に限ったことなく、文京キャンパスも一年生、医学科教員にとってはわかりにくい。そもそも、弘前の街も同様に、通りの名前、交差点の名称がほとんどない。歩行者用信号も少ない。すべて、はじめの人の想定していない。慣れるからとか、昔からこうなっているからとか、わかっている人にしかわからない。いいという意識がどこにあるのではと思ってしまう。

平成二十年度動物慰霊祭と動物実験規程の制定

動物実験施設長 中根 明夫
(感染生体防御学講座教授)

去る五月二十日医学部基礎講堂において、遠藤正彦学長をはじめとして、多数の教員および大学院・学部学生のご出席のもと、平成二十年度動物慰霊祭が行われました。慰霊祭では、まず佐藤敬医学研究科長から祭詞をいただきました。続いて、出席者による献花が行われ、厳かな中で慰霊祭は無事終了しました。慰霊祭に引き続き記念講演が行われました。本年は脳神経血管病態研究施設脳神経内科学講座東海林幹夫教授に「動物モデルによる神経難病治療法の開発」と題する講演をいただきました。近年、神経難病の診断および治療研究に遺伝子改変マウスを用いた成果がいかに

重要な情報を提供しているかについて、とてもわかりやすく講演していただきました。

さて、動物実験に関してここ半年ほどで、大きな変化がありました。そのことについて少々述べたいと思います。平成十八年六月に「動物の愛護及び管理に関する法律」が一部改正され、それに連動して、文部科学省から「研究機関等における動物実験等の実施に関する基本指針」が告示され、日本学術会議から「動物実験の適正な実施に向けたガイドライン」が出されました。国立大学法人動物実験施設協議会では、この機会に動物実験に関する規程の全国統一を行うことと

し、機関内規程（案）の作成を行いました。これを受けて各国立大学で機関内規程の制定が行われました。弘前大学では東海林幹夫委員長（当時、大学院医学研究科）を中心に全学動物実験委員会にて検討を行い、平成十九年十一月十九日に「弘前大学動物実験に関する規程」が制定されました。この規程に従って新たな弘前大学動物実験委員会が組織され、微力ながら私が委員長として新規規程に基づいた運用に関与することになりました。これまでは、実験動物の飼養・実験室等の管理基準や運用はその事情に合わせて各学部・研究科主体で行われていましたが、新規規程では学長の下、全学

同じ基準の運用となったと同時に大きな変更点がありました。まず、大学院医学研究科附属動物実験施設をはじめとする実験動物を飼養する施設（飼養保管施設）および実験動物を使用する実験室については改めて申請をしていただき、三月に動物実験委員会の委員が全学にまたがる申請施設・実験室を審査し、承認しました。また、一部の申請施設・実験室には、規程の基準を満たすように改善をお願いしました。第二の大きな変更点は、教育訓練の義務化です。動物実験責任者、動物実験実施者及び飼養者は必ず教育訓練（五周年有効）が科せられ、これまで動物実験委員会による三回の教育訓練が実施されました。本実験動物施設では入館の登録は教育訓練を受講した人のみにしていただきます。また、教育訓練は学生実習で動物を扱う場合も対象となり、実習で小動物を使用する病態薬理学講座には学生に対する教育訓練の実施をしていただきました。第三に、毎年自己点検と評価が義務づけられました。しかもその結果は公表することになっています。また、外部評価も科せられることになっており、自己点検・評価については動物実験委員会が具体化し、動物実験をしている先生方

に、その作成をお願いすることになりますので、先生方のご理解をお願いいたします。

最後に、長年本動物実験施設の専任教員として、施設の管理に多大なる貢献をいただいた八木澤誠准教授が三月三十一日をもって退職されました。なかなか表では見えにくい部分ではありましたが、八木澤先生の施設管理とその充実のご業績には感謝いたします。四月一日には後任として成田浩司助教が動物実験施設の専任教員として感染生体防御学講座から異動しましたので、よろしくお願いたします。

このように、この半年余で動物実験に関わるさまざまなことが急激に変化し、まさに「動物実験維新」といったところでしょうか。まだまだ不完全なことが多く現状ですが、先生方にはご理解とご協力をお願いいたします。



入試活動報告二

スクーリング&オープンキャンパス開催

医学科入試専門委員長 中 根 明 夫
(感染症体防御学講座教授)



医学科スクーリングの様様

県からも参加がありました。講義は四コマ組みました。最初に佐藤敬医学部長から講義「弘前大学医学部の姿勢と将来性」が行われ、弘前大学医学部の概要と医学部学生・医師・医学研究者として求められる人間像について話がありました。入試専門委員長による講義二「弘前大学AO入試選抜の概要」ではAO入試の資格、選抜方法について話しました。奥村謙学務委員長による講義三「弘前大学医学部医学科の教育」では、実施されている医学教育六年間について話がありました。さらに加藤博之卒後臨床研修センター長による講義四「弘前大学医学部の卒前卒後教育と将来の展望」では、卒前臨床実習と医学部附属病院での卒後臨床研修が紹介されました。参加者はいずれの講義も熱心に聴

き入っていました。最後に質疑応答がありました。なかなか鋭い質問も出ました。第二回目のスクーリングは八月九日(土)に行われました。今回はおよそ百十名が参加しました。前回参加がなかった北海道と八戸地区からも多く参加者がありました。今回は講義は四コマ組まれ、講義一から講義三までは前回と同じプログラムでしたが、最後の講義は遠藤正彦学長による「弘前大学医学部元教授高橋信次先生の歩み―地方の大学から世界的大発見と文化勲章まで―」と題する講義がありました。標題の高橋信次先生のお話はもちろん、弘前大学医学部で活躍・業績を挙げられた先生方のご紹介もありました。質疑応答の後、希望者を対象に、福田幾夫教授により心臓外科手術についてビデオを交えた紹介がありました。さらに一部の参加者は附属病院新外来棟を見学して帰途につきました。

食後、青森県から山中朋子先生に来ていただき、「医学修学資金貸与制度について」という題でお話をいただきました。引き続き施設見学のプログラムです。昨年まで附属病院四施設の施設見学を並行して行ってきましたが、手術部への見学希望者が多く時間切れで希望がかなわずに終了する状況でしたので、今年は希望者全員に大講義室で福田幾夫胸部心臓血管外科学講座教授と山内早苗医師の解説のもとに手術ビデオが放映されました。最後に薬剤部、検査部、放射線部の三施設の施設見学が行われ、午後一時半に在校生と見学者との意見交換会が行われ、医学科のオープンキャンパスが閉幕しました。今年の参加者は、延べ三百四十名となり、県内、東北各地のみならず、東京、静岡、奈良など全国から参加者が集まりました。

七月十八日(金)、青森グランドホテルにおいて、「青森県内高等学校進路指導担当教諭との懇談会」が開催されました。この懇談会も今年で四回目となりました。弘前大学側から、佐藤医学部長、入試専門委員長、神入試験長をはじめ六名、県内高校側は十四校の進路指導担当の先生方が出席しました。佐藤医学部長のあいさつの後、入試専門委員長から平成二十一年度の入試結果と平成二十一年度の入試の変更

点について説明を行いました。その後、大学と高校間の質疑応答や意見交換が行われ、二時間の懇談会が終了しました。以上報告しましたように、入試に関するさまざまな行事が目白押しに行われています。特に二十一年度から実施されるAO入試に関し受験生はもちろん、保護者および高校関係者がきわめて高い関心を寄せており、実施する側としては気を引き締めて準備をしなければいけないと考えています。本年度もすでに三年次学士編入学の選抜も始まっ

ており、先生方には各選抜の運営と実施にご理解とご協力をお願いする次第です。最後に、今回のスクーリングおよびオープンキャンパスの準備や当日の施行に多大な貢献をいただいた先生方および学務グループに、深く感謝いたします。

臨床実習ファカルデイベロップメント(BSL-FD) 開催

学務委員長 奥 村 謙
(循環呼吸腎臓内科学講座教授)



臨床実習ファカルデイベロップメント(BSL-FD)の様子

弘前大学医学部医学科では、五年次に各診療科をローテート実習し(Bod Side Learning, BSL)、六年次に医学部附属病院と医学部関連医療機関においてクリニカルクラシックを行っている。BSLは学生が臨床例に初めて接する機会であり、またクリニカルクラシックをより有効で有意義なものにするためにもBSL教育内容を改善していく必要がある。この目的で本年七月十一日に第一回BSL-FDを行った。今回は初回でもあり、内科系七診療科(消化器血液内科、循環呼吸腎臓内科、内分泌代謝内科、神経科精神科、小児科、放射線科、神経内科)がそれぞれのBSL教育指導内容をパワーポイントを用いて紹介し、質疑応答という形で実施した。それぞれの診療科の特性に応じたBSLが実施されていることは理解できたが、教育において重要なことは繰り返すことによりその効果を高めることであり、内科系に共通したプログラムを作成することも必要と考

えられた。例えば実習期間中に二例の患者を担当し、医療面接、身体診察、検査所見の判読等を毎日、指導医または主治医と一緒に二ヶ月間繰り返せば基本的臨床技能は十分に身につくはずである。各科の特徴を考慮しつつも共通の指導体制を構築することが今後の課題と考えられた。

当日は佐藤医学研究科長はじめ、各診療科教員、BSL担当医、指導医、その他多くの先生方が出席され、各診療科の教育指導内容について熱心に聴き入れられていた。BSL-FDを重ねることにより、弘前大学らしい、

他の大学ではできない有効なBSLが構築されていくことを期待している。なお今回は十月十六日に外科系診療科が「より良いBSLのために―当科での工夫―」というタイトルの下で教育内容を紹介していただく。内科系教員、基礎系教員の方も是非ご出席下さい。



オープンキャンパスの様様②

要」ではAO入試の資格、選抜方法について話しました。奥村謙学務委員長による講義三「弘前大学医学部医学科の教育」では、実施されている医学教育六年間について話がありました。さらに加藤博之卒後臨床研修センター長による講義四「弘前大学医学部の卒前卒後教育と将来の展望」では、卒前臨床実習と医学部附属病院での卒後臨床研修が紹介されました。参加者はいずれの講義も熱心に聴

き入っていました。最後に質疑応答がありました。なかなか鋭い質問も出ました。第二回目のスクーリングは八月九日(土)に行われました。今回はおよそ百十名が参加しました。前回参加がなかった北海道と八戸地区からも多く参加者がありました。今回は講義は四コマ組まれ、講義一から講義三までは前回と同じプログラムでしたが、最後の講義は遠藤正彦学長による「弘前大学医学部元教授高橋信次先生の歩み―地方の大学から世界的大発見と文化勲章まで―」と題する講義がありました。標題の高橋信次先生のお話はもちろん、弘前大学医学部で活躍・業績を挙げられた先生方のご紹介もありました。質疑応答の後、希望者を対象に、福田幾夫教授により心臓外科手術についてビデオを交えた紹介がありました。さらに一部の参加者は附属病院新外来棟を見学して帰途につきました。

日(八月八日)には、弘前大学オープンキャンパスが開催されました。昨年一昨年と臨床大講義室に立ち見が出るほどの参加者でしたので、今年は小講義室にも映像と音声と同時に届くようにしました。大講義室は予想通

た。大講義室は予想通り満席となり、小講義室もほぼ埋まりました。午前十時からプログラムが開始しました。まずは佐藤敬医学部長から、オープンキャンパスへの参加の歓迎と弘前大学医学部医学科への誘いの挨拶がありました。次に、鬼島宏副学務委員長から弘前大学医学部医学科の特徴ある研究・教育について

紹介がありました。引き続いて、廣田和美麻酔科学講座教授が「麻酔管理の現状と展望」と題した模擬講義を行いました。華岡青洲から始まり手術における麻酔科医の仕事のビデオを交え、四十分間の話に参加者は聴き入っていました。その後一転リラックスした「学生コーナー」が始まりました。医学科四年生の小林睦季君に楽しい学生生活を語ってもらいました。昼

部医学科の入学定員増の報道がなされる中、入試関連の行事が粛々と進んでいます。平成二十一年度の入試から推薦入学を廃止し、新たにアドミッション・オフィス入試(AO入試)が行われます。AO入試のキャッチフレーズは「郷土を愛する医師の育成」医師たる人材の発掘弘大AO入試」です。AO入試に先立ち、受験生に弘前大学医学部医学科について理解していただく目的で、二回のスクーリングを実施しました。第一回目は五月十七日(土)午後一時から四時まで、臨床大講義室で行いました。高校三年生を中心に保護者、高校教諭を含めおよそ百五十名が参加しました。参加者は青森県内が中心でしたが、秋田県と岩手



オープンキャンパスの様様①

部医学科の入学定員増の報道がなされる中、入試関連の行事が粛々と進んでいます。平成二十一年度の入試から推薦入学を廃止し、新たにアドミッション・オフィス入試(AO入試)が行われます。AO入試のキャッチフレーズは「郷土を愛する医師の育成」医師たる人材の発掘弘大AO入試」です。AO入試に先立ち、受験生に弘前大学医学部医学科について理解していただく目的で、二回のスクーリングを実施しました。第一回目は五月十七日(土)午後一時から四時まで、臨床大講義室で行いました。高校三年生を中心に保護者、高校教諭を含めおよそ百五十名が参加しました。参加者は青森県内が中心でしたが、秋田県と岩手

平成二十年度大学院教育FD

大学院における「がんプロフェッショナル養成プラン」の取り組み

学事委員長 若林孝一

(脳神経病理学講座教授)

昨年度から大学院においても教育FDを行うことが義務化されました。本研究科では、秋田大学、岩手医科大学、岩手県立大学との共同申請により、平成十九年度に「がんプロフェッショナル養成プラン」に採択されました。そこで、今年度は大学院における「がんプロフェッショナル養成プラン」の取り組みをテーマに平成二十年四月二十四日に医学部コミュニケーションセンターにおいて大学院教育FDを開催しました。

まず、本学における実施責任者である阿部由直教授



（放射線科学講座）から「がんプロフェッショナル養成プラン」について説明がありました。なお、がんプロの詳しい内容については、新しくなったホームページの「大学院医学研究科」の「入学案内」をクリックすると、「北東北における総合的がん専門医療人養成プラン」のホームページに入ることができます。

その後、岩手医科大学腫瘍センター長の池田健一郎先生に「がん治療認定医制度」について説明していただきました。池田先生の講演は、がん対策推進基本計画、がん治療認定医制度が生まれた背景、申請資格、求められる知識、学会別の認定医数など具体的な内容を含んでおり、わかりやすいものでした。

さらに、本学脳神経外科の浅野研一郎先生には「がん治療認定医試験を受けて」と題する講演をお願いしました。浅野先生

のような準備が必要か、どの程度の勉強が必要か、さらに試験会場での注意点など、時にユーモアを交え、受験者にはとても参考になる内容でした。

最後に学事委員長の若林が「がんプロフェッショナル養成プランにおける大学院教育」について説明を行いました。がんプロの大学院コースを選択した学生には以下のメリットがあります。①大学院における学位

取得と認定医・専門医の取得を並行して行うことができます。②がん化学療法、放射線治療、緩和ケアを含む横断的な臨床実習が受けられます。③秋田大学、岩手医科大学の大学院講義がインターネットで受けられます。④学会参加の際に年間十万円を上限として交通費が支給されます。現在までに平成二十年度入学者のうち六名が本コースを選択しています。随時、受け入

「ヒロダイ・いきいき 元気塾」を開催して

社会医学講座 教授 中路重之

会栗橋病院の本田宏副院長（NPO法人医療制度研究会代表理事）でした。先生は一九七九年の本学卒で、同第一外科、東京女子医大第三外科を経由して一九八九年より今の病院に勤務しておられます。現在、医師不足、医療崩壊をテーマに日本各地で講演活動をして

おられます。数年前より、当方の社会医学の講義「発展臨床医学Ⅰ」を二コマ受け持っていたいただいており、学生に最も人気のある講義となっています。今回の講演は、午後の二コマの講義の後でしたので、三コマ連続の講義・講演となり、先生には大変なご苦労をおか

けしました。ただ、先生はとくにそのことは意に介せず「少しでも多くの方に自分の話を聞いていただきたい」を繰り返しておられました。

参加者は約八十名でした。そのうち約半数が医学部学生、残りが医師会の先生方、市会議員、大学関係者であり、市民の方も十名以上おられました。

本田先生の講演の要旨は大略以下のようにまとめられます。

1. 医療崩壊の最大の原因は医師数不足と医療費抑制である。日本はこの双方ともOECD加盟国のなかで下位に位置しており、この解決なくして現状は打開できない。

2. 国民に正しい情報が伝わらないことにより、正しい世論の醸成がなされてこなかった。これには、行政側の情報

操作もあるが、医療側（とくに医師）からの正しい情報発信がなかったことも背景にある。

3. 国民が医療に関する正しい情報を共有しなくてはならない。そのことで医師数の不足と医療費の不当抑制を正す土壌ができ、医療崩壊の解決策が見えてくるはずである。

講演のスライド数は多く、かなり早口で話されたのですが、同じ問題点を違った切り口から見ることができ、また何よりもスライド、話の筋書きが周到に準備されていたので、講演後の参加者の理解度と満足感は大きかったと推察されます。

講演後は活発な質疑応答がなされましたが、なかでも印象的だったのは、「女



第一回「ヒロダイ・いきいき元気塾」スポーツ健康講習会

性医師が増加すること、医師全体（男性医師）の負担が大きくなるのではないかと」という質問に対し、本田先生の答え「子育ての避けられない女性医師でも対処できるような環境に医師全体を置くようにすべきではないか」、でした。

七月十四日（月）午後六時より、弘前市武道館にて第一回が開催されました。講師は、日本体育大学柔道部の田辺勝講師（中量級）、小島新助教（重量級）でした。両選手とも往年（？）の名選手です。田辺先生の主な優勝は、一九九三、一九九四年正力杯全日本学生体重別選手権、一九九三年（次ページへ続く）

（前ページより）
東アジア競技会、一九九五年講道館杯、太平洋選手権、ユニバーシアード、一九九七年全日本実業団選手権、一九九八年全日本選抜体重別選手権、です。小嶋先生もまた、二〇〇一年全日本選手権三位という実績のある名選手です。教室には、鶴田中学校、弘前中央高校など五校から約六十名の中学・高校の柔道部員が集まりました。練習に先立ち、全参加者に体組成測定が行われ、全体および部位別の体脂肪量（率）と筋肉量が測定され、本講座の梅

田准教授の方から健康とパフォーマンス維持のための食生活、トレーニングのあり方につき話がありました。生徒の家族も多数駆けつけ、「柔道と健康を一緒にしたこのような機会をもっと増やして欲しい」という要望が寄せられました。

「ヒロダイ・いきいき元気塾」は、市民の皆さんとできるだけ接触できる機会を増やそうと考え企画されました。社会医学センターでは現在岩木健康増進プロジェクトなどの社会活動を行っています。が、健診方式

「ヒロダイ・いきいき元気塾」は、市民の皆さんとできるだけ接触できる機会を増やそうと考え企画されました。社会医学センターでは現在岩木健康増進プロジェクトなどの社会活動を行っています。が、健診方式

だけでは集客力に限界があります。そこで、種々の切り口を用意して、できるだけ多くの住民の方にお会いしようと思われたのが本塾です。初期の目的を達成するために、テーマや表現型を多彩にして、それぞれあゆる年代の老若男女と出会うことができるような取り組みにしたいと考えています。

以下に今後の予定されている講師を挙げてみました。二か月に一回のペースで行う予定ですので、興味がおありの方はぜひご参加ください。

研究室紹介

歯科口腔外科学講座

歯科口腔外科学講座 教授 木村 博 人

歴史

当教室は昭和五十四年四月、医学部における臨床系講座としては十七番目に開設されました。以後、十九年余を経過しておりますが、平成六年四月に初代、鈴木 貢 名誉教授から木村がバトンを受け継ぎました。この間、本学部・附属病院における教育・診療・研究に加えて多方面における社会活動に、教職員共々精一杯の努力を払って参りました。以下、各部門における概要を記します。

教育

医学部医学科における教育は、年間十回程の臨床系統講義と一週五日間の臨床実習を担当しております。昨今の医学科学生は国試偏重の傾向が見受けられますが、人体の機能と疾病に幅広く対応できる医療人の育成を念頭に、歯科学・口腔外科学を系統的に学ぶ最初で最後の機会であることを強調して、なおかつ興味を持って学習できるよう種々の工夫を重ねております。また、保健学科看護学や学外の医療施設においても歯科口腔外科学を教育する機会を得ております。

研究

研究活動は、顎口腔領域に発生する種々の疾患の病態を解明し、新たな診断・治療法の開発を目的としています。主な研究対象は端的に言えば「骨」と「癌」になります。最近では病的骨吸収の機序を解明するため、破骨細胞・骨芽細胞の活性化と炎症あるいはメカニカルストレスとの関連において、各種骨吸収因子（サイトカイン、フリーラジカル等）の関与やシグナル伝達経路の関連遺伝子発現等を検討しています。口腔癌の研究では、新規の癌治療法として期待されている光線力学的治療の口腔癌への応用のための基礎的研究を行っています。いずれも、臨床的な診断・治療につながるよう、最新の分子生物学的研究手法も取り入れ、大学院生を中心に実験研究を継続しております。

診療

歯科口腔外科は、歯・歯周組織の疾患に加え、口の粘膜、顎の骨や関節などに起る様々な病気を扱っています。代表的な疾患は、「顎骨骨折」、「下顎前突症」、「顎骨内良性腫瘍」、「口腔癌」



平成20年7月12日 教室旅行－函館－にて、教室OB・外来・病棟スタッフと共に

第51回東医体で 空手道男子完全優勝で総合8連覇！ 剣道男子団体、個人水泳、空手道、 弓道でも準優勝 男女総合は第6位

東医体理事 加 地 隆（生体構造医科学講座教授）

本年の七月から八月にかけて横浜市立大学医学部の主管で行われた第五十一回東日本医科学学生総合体育大会夏季大会において、弘前大学学生は日頃の練習成果を存分に発揮し、男女総合で第6位と健闘した。とくに男子空手部の活躍が目立った。全体的には昨年、一昨年よりも相対的にやや力不足になった部が多かったようであるが、来年以降の再起を期待したい。なお昨年度第五十回大会の夏冬総合成績は第五位で善戦したといえよう。若い時に心身を鍛え、色々な人と交流

することは重要である。今後ともスポーツと学業の両立に努力してほしい。

【空手部】男子総合 八連覇	【水泳部】男子団体準優勝	【剣道部】男子団体準優勝	【柔道部】男子団体準優勝	【弓道部】男子団体準優勝	【空手部】男子団体準優勝	【水泳部】男子個人準優勝	【剣道部】男子個人準優勝	【柔道部】男子個人準優勝	【弓道部】男子個人準優勝	【空手部】男子個人準優勝	【水泳部】男子個人準優勝	【剣道部】男子個人準優勝	【柔道部】男子個人準優勝	【弓道部】男子個人準優勝	【空手部】男子個人準優勝
【団体】（組み手）優勝（二型）	【個人】（組み手）小渡亮介・優勝、小渡亮介・優勝、内田康幸・優勝	【団体】（組み手）小渡亮介・優勝、小渡亮介・優勝、内田康幸・優勝	【個人】（組み手）小渡亮介・優勝、小渡亮介・優勝、内田康幸・優勝	【団体】（組み手）小渡亮介・優勝、小渡亮介・優勝、内田康幸・優勝	【個人】（組み手）小渡亮介・優勝、小渡亮介・優勝、内田康幸・優勝	【団体】（組み手）小渡亮介・優勝、小渡亮介・優勝、内田康幸・優勝	【個人】（組み手）小渡亮介・優勝、小渡亮介・優勝、内田康幸・優勝	【団体】（組み手）小渡亮介・優勝、小渡亮介・優勝、内田康幸・優勝	【個人】（組み手）小渡亮介・優勝、小渡亮介・優勝、内田康幸・優勝	【団体】（組み手）小渡亮介・優勝、小渡亮介・優勝、内田康幸・優勝	【個人】（組み手）小渡亮介・優勝、小渡亮介・優勝、内田康幸・優勝	【団体】（組み手）小渡亮介・優勝、小渡亮介・優勝、内田康幸・優勝	【個人】（組み手）小渡亮介・優勝、小渡亮介・優勝、内田康幸・優勝	【団体】（組み手）小渡亮介・優勝、小渡亮介・優勝、内田康幸・優勝	【個人】（組み手）小渡亮介・優勝、小渡亮介・優勝、内田康幸・優勝

個人（組み手）／一位 小渡亮介（二型）／一位 小渡亮介	女子団体 六位 内田康幸	個人（二型）／三位 小林麻美	【水泳部】男子個人準優勝	【剣道部】男子個人準優勝	【柔道部】男子個人準優勝	【弓道部】男子個人準優勝	【空手部】男子個人準優勝	【水泳部】男子個人準優勝	【剣道部】男子個人準優勝	【柔道部】男子個人準優勝	【弓道部】男子個人準優勝	【空手部】男子個人準優勝	【水泳部】男子個人準優勝	【剣道部】男子個人準優勝	【柔道部】男子個人準優勝
【団体】（組み手）小渡亮介・優勝、小渡亮介・優勝、内田康幸・優勝	【個人】（組み手）小渡亮介・優勝、小渡亮介・優勝、内田康幸・優勝	【団体】（組み手）小渡亮介・優勝、小渡亮介・優勝、内田康幸・優勝	【個人】（組み手）小渡亮介・優勝、小渡亮介・優勝、内田康幸・優勝	【団体】（組み手）小渡亮介・優勝、小渡亮介・優勝、内田康幸・優勝	【個人】（組み手）小渡亮介・優勝、小渡亮介・優勝、内田康幸・優勝	【団体】（組み手）小渡亮介・優勝、小渡亮介・優勝、内田康幸・優勝	【個人】（組み手）小渡亮介・優勝、小渡亮介・優勝、内田康幸・優勝	【団体】（組み手）小渡亮介・優勝、小渡亮介・優勝、内田康幸・優勝	【個人】（組み手）小渡亮介・優勝、小渡亮介・優勝、内田康幸・優勝	【団体】（組み手）小渡亮介・優勝、小渡亮介・優勝、内田康幸・優勝	【個人】（組み手）小渡亮介・優勝、小渡亮介・優勝、内田康幸・優勝	【団体】（組み手）小渡亮介・優勝、小渡亮介・優勝、内田康幸・優勝	【個人】（組み手）小渡亮介・優勝、小渡亮介・優勝、内田康幸・優勝	【団体】（組み手）小渡亮介・優勝、小渡亮介・優勝、内田康幸・優勝	【個人】（組み手）小渡亮介・優勝、小渡亮介・優勝、内田康幸・優勝

7 〔三〕東北大学	8 〔三〕新潟大学・東京女子医科大学	●第五十回（平成十九年度）東医体夏冬総合成績	【男女総合】	1 〔七〕慶応義塾大学	2 〔四〕山梨大学	3 〔四〕千葉大学	4 〔四〕筑波大学	5 〔三〕順天堂大学	6 〔三〕弘前大学	（冬期部門）	〔スキー部〕	女子 回転 六位 横山絵美	複合 四位 横山絵美	（女子）	1 〔三〕東京女子医科大学医学部	2 〔二〕千葉大学	3 〔九〕群馬大学医学部	4 〔九〕筑波大学医学部専門学群	5 〔六〕札幌医科大学	11 〔二〕弘前大学医学部
-----------	--------------------	------------------------	--------	-------------	-----------	-----------	-----------	------------	-----------	--------	--------	---------------	------------	------	------------------	-----------	--------------	------------------	-------------	---------------

弘前大学医学部 臨床教授・臨床准教授 称号付与者

臨床教授

坂田 優（三沢市立三沢病院長）	平成二十年六月一日～平成二十三年五月三十一日
藤田 康文（青森県立つくしが丘病院副院長）	平成二十年六月一日～平成二十三年五月三十一日
高谷 俊一（五所川原市立西北中央病院副院長）	平成二十年六月一日～平成二十三年五月三十一日
八木橋信夫（黒石市国民健康保険黒石病院副院長）	平成二十年六月一日～平成二十三年五月三十一日
末綱 太（八戸市立市民病院副院長）	平成二十年六月一日～平成二十三年五月三十一日
佐藤 重美（一部事務組合下北医療センターむつ総合病院副院長）	平成二十年六月一日～平成二十三年五月三十一日

臨床准教授

小倉 雄太	（独立行政法人労働者健康福祉機構青森労災病院外科部長）	平成二十年六月一日～平成二十三年五月三十一日
小野 裕逸	（独立行政法人労働者健康福祉機構青森労災病院心臓血管外科部長）	平成二十年六月一日～平成二十三年五月三十一日

人事異動

●大学院医学研究科

配置換（20・6・1）

神経精神医学講座 助教	菊池 淳宏
（神経精神科助教）	松岡 貴志
（神経精神科助教）	木村 大輔
（呼吸器外科・心臓血管外科助教）	米山 高弘（泌尿器科助教）

昇任（20・8・1）

消化器外科科学講座 教授	袴田 健一
--------------	-------

辞職（20・8・15）

脳神経内科学講座 准教授	富山 誠彦
--------------	-------

●医学部附属病院

配置換（20・6・1）

神経科精神科 助教	藤井 学
（神経精神医学講座助教）	楠木 将人
（神経精神医学講座助教）	渡辺 健一
（胸部心臓血管外科学講座助教）	泌尿器科 助教
（泌尿器科学講座助教）	今井 篤

辞職（20・6・30）

放射線科 助教	大畑 崇（むつ総合病院）
（歯科口腔外科助教）	佐藤 寿

編集後記

医学部ウォーカー四十六号をお届けします。

社会医学センター主催の元氣塾の講演を聴いてきました。一般市民の方々、医学部学生諸君、教員などなど、様々な人が一同に介してというものです。講師は、最近テレビ、著書で医療崩壊の実態を伝えている本田 宏先生でした。本田先生の講演によると、最初の頃まったく主張を取り上げてもらえな

お知らせ

医学部ウォーカーへ教授就任ご挨拶を掲載希望の方は、弘前大学医学研究科総務グループ（総務担当）までご連絡願います（0172-395106）。ただし、紙面の都合により掲載ができない場合もございますので、あらかじめご了承ください。

社団法人 青森医学振興会

沿革 平成11年3月1日 弘前大学医学部医学科後援会・青森県立中央病院後援会発足（任意団体）
平成13年4月2日 社団法人青森医学振興会設立許可（青森県）

振興会では、21世紀の青森県の医学・医療を積極的に支援しようとする事業を行っております。
○医学教育の助成 教育活動を活性化するための支援
○医学研究の助成 研究活動を高度化するための支援
○地域医療振興事業の助成 地域医療に貢献するための支援
○医学国際交流の助成 国際学術交流の支援

随時、会員の募集とご寄附の受付をしております。
会費と寄附金の納入方法は下記の通りです。

口座名	社団法人 青森医学振興会	普通 1087485 ※ 各銀行の本支店及びゆうちょ銀行から振込む場合は、手数料無料です。
口座	青森銀行 弘前支店 みちのく銀行 大学病院前支店 ゆうちょ銀行振替（旧 郵便振替）	普通 0198579 02200-4-57580
会費	会員種別 年会費	医学部教員 1万円 医学部卒業生 2万円 賛同する個人 1万円 賛同する団体 10万円

お問い合わせ TEL: 0172 (33) 5111 内線6519 E-mail: jm6519@cc.hirosaki-u.ac.jp

弘前大学 後援会のご案内

弘前大学後援会では、学生の学業、課外活動への助成、学生の進路指導に必要な助成等学生生活の多岐にわたる分野の助成を行っております。つきましては、何卒本会の趣旨に御賛同頂きまして、各位の格別の御高配、御

支援を賜りますよう、切にお願い申し上げます。

なお、入会方法等の詳細については、弘前大学総務部総務課広報・支援グループ（Tel: 0172-39-3012 E-mail: jm3012@cc.hirosaki-u.ac.jp）までご連絡ください。また、弘前大学後援会ホームページ（http://www.hirosaki-u.ac.jp/kouen/index.html）をご覧ください。

・医学部ウォーカー第43号及び第45号において、一部誤りがありましたので訂正いたします。関係者および読者の皆様にお詫び申し上げます。

第43号 14ページ 弘前大学医学部臨床教授・准教授称号付与者 臨床准教授
誤 川口俊明（青森県立中央病院泌尿器科副部長）
正 布村仁一（青森県立中央病院神経内科副部長）

第45号 8ページ 弘前大学医学部臨床教授・准教授称号付与者 臨床教授
誤 村山徳昭（大館市立総合病院麻酔科部長）
正 村川徳昭（大館市立総合病院麻酔科部長）

かったようです。それでもあきらめずに発信しつづけて、今があるとのこと。このことから伝える努力をおしまないということが、医学、医療にたずさわる者にとって、いかに重要かを示していると思います。基礎医学部門においては、研究成果を学会、論文等で発表することは当然のこととして求められていますが、さらに昨今からは、研究の社会還元という観点から、一般向け成果発表というものも求められる傾向が出てきています。専門分野だから、わかりにくいのは当たり前、というままでは、結局自分達の首を絞めることになりそうです。医療部門でも、今まで以上に、伝える、しかもメディア任せではない説明する努力が、生き残りの条件ではとの印象をうけました。（上野 記）